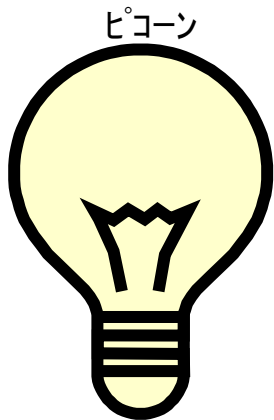


棚卸資産評価損と純利益とキャッシュフローの関係

	正常販売	過年度に 棚卸資産評価損計上後 正常販売	値引き販売	過年度に 棚卸資産評価損計上後 値引き販売	大幅値引き販売	過年度に 棚卸資産評価損計上後 大幅値引き販売
販売価格	120	120	100	100	80	80
棚卸資産価額(売上原価)	100	80	100	80	100	80
税引前利益	20	40	0	20	-20	0
法人税等	8	8	0	0	-8	-8
純利益	12	32	0	20	-12	-8
過去に計上した 棚卸資産評価損	-	20	-	20	-	20
トータルのキャッシュフロー	=+120-100-8 =+12	=+120-(80+20)-8 =+12	=+100-100-0 =0	=+100-(80+20)-0 =0	=+80-100-(-8) =-12	=+80-(80+20)-(-8) =-12



純利益は過年度に棚卸資産評価損を計上したか否かで大きく変化するが、トータルのキャッシュフローの大きさは棚卸資産評価損の有無に関わらず一定。また、法人税等の金額も棚卸資産評価損には左右されない(評価損は損金算入されないから)。キャッシュフローの大きさは「いくらで仕入れていくらで売ったか」のみで決まる。トータルで言えば、棚卸資産評価損を計上したか否かは経営上はあまり意味や効果はなく、**「販売価格」の大きさがキャッシュフローの大きさを決定する**、と言える。

当たり前過ぎる結論かもしれないが、「できるだけ安く仕入れてできるだけ高く売る」という一番基本的なことが経営では何より大切だということだ。

そして、棚卸資産の管理上大切なことは、帳簿価額を減らしても在庫量自体は減らない、ということだ。

在庫を減らす方法は究極的には販売しかない、ということを常に肝に銘じておくべきである。